

# 彫刻「Sun Sister」リニューアル記念トークイベント 「パブリックアート散歩 with ヤノベケンジ」開催レポート

兵庫県立美術館の海側にある野外彫刻「サン・シスター（Sun Sister）」は、阪神・淡路大震災から20年が経過した2015年に設置され、神戸の復興を象徴する作品として多くの人々に親しまれてきました。2024年11月に行われた外装のリニューアルを記念して、「サン・シスター」作者の現代美術作家であり、京都芸術大学の教授であるヤノベケンジ氏（以下、ヤノベ先生）をお招きし、トークイベント「パブリックアート散歩 with ヤノベケンジ」を2025年3月15日に開催しました。

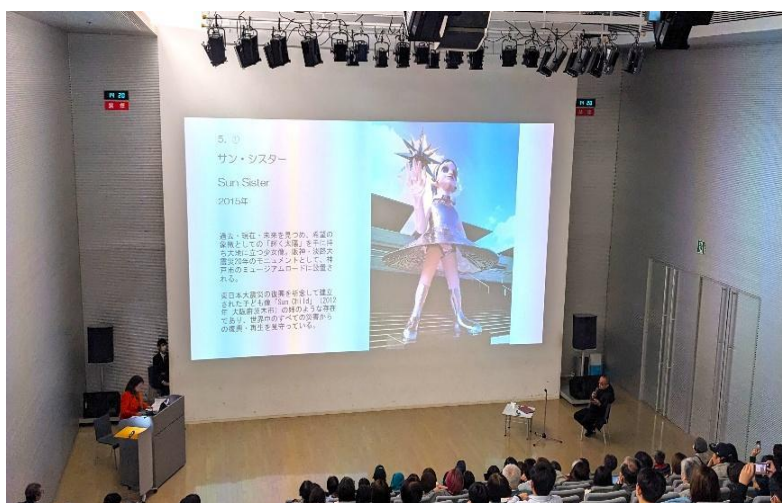


現代美術作家 ヤノベケンジ氏



「サン・シスター（Sun Sister）（2015）」

本イベントは二つのパートで構成され、第一部のトークイベントでは、「サン・シスター」に関連するさまざまなアート作品についてヤノベ先生からお話を伺い、また講演会の事前に行った関係者へのインタビューを通じて、作品の背景や地域との関わりについても深く掘り下げることができました。そして、第二部のアート作品散策では、「サン・シスター」をはじめ、なぎさ公園の彫刻群など、ミュージアムロードのパブリックアートをヤノベ先生と一緒に見ていきました。これらの作品一つ一つには、地域の人々をつなげ、地元への愛着を深め、また外から多くの人々を呼び込む可能性があります。神戸県民センターはじめ、神戸市や地域の3つの美術館など地元関係者が、このミュージアムロードがわくわくできるアートエリアとなるよう連携しながら作品を適正に管理していきます。



講演会 第一部 会場風景

ヤノベ先生の作品を紹介しながら質問にも応じる進行役を務めたのは黒木杏紀さん。多くの人にアートの楽しさを知ってもらうために、さまざまなアートの普及活動を行っているアートライターです。以下黒木杏紀さんによるレポートにより、当日の様子を紹介します。

## 1. 初期のヤノベ作品から「サン・シスター」までの代表的な4点を紹介

第一部のトークイベントは、ヤノベ先生のサービス精神とフレンドリーな関西弁の語り口によって会場が笑いに包まれ、和やかな雰囲気の中で始まりました。はじめに、ヤノベ先生が参加者に質問したところ、2000年以前の作品を知らない人が半数以上いることが明らかになりました。そこで、今回のメイン作品である「サン・シスター」の前に発表された代表的な4つの作品を選び出し、進行役が簡単な説明を行った後、ヤノベ先生から作品についてのお話を伺いました。

最初に紹介したのは、ヤノベ先生のデビュー作で、1990年代の日本の現代アートシーンを先導したと記念すべき作品「タンキング・マシーン（1990）」。

これはタンク上部に白いガスマスクを配し、内部は体温程度に温められた生理的食塩水で満たした体験型の彫刻で、中に人が入ることができる作品です（<https://yanobe.com/works/52>）。

二つ目は、未来の人間型ロボットのイメージとして、子どもたちの憧れである鉄腕アトムなどのオマージュとして命名された「アトムスーツ（1997）」。

1997年にチェルノブイリを訪問するなど（「アトムスーツ・プロジェクト」1997～2003年）世界の問題に向き合うメッセージ性の強い作品です。人気アニメを意識した理由として、ヤノベ先生は「人に届けるにはユーモアを持つことが大切だから」と話されました（<https://yanobe.com/works/729>）。

三つ目は、バーコードの頭にちよび髭があり、子どもと大人の姿が融合したようなユーモラスな「トラヤン（2003）」（<https://yanobe.com/works/786>）。

そして、最後に紹介したのは東日本大震災をきっかけにアートの役割を再考し、未来に希望の光を示すために作られた「サン・チャイルド（2011～2012）」です。制作テーマは、20世紀から21世紀にかけて新しい時代を迎えるために、現代社会における「サヴァイヴァル」から「リヴァイヴァル（再生）」へと移行し、その物語は家族や社会へと広がりました（<https://yanobe.com/works/855>）。

本講演会のメイン作品である「サン・シスター（2015）」は、阪神・淡路大震災からの復興を象徴するモニュメントとして設置され、全世界の災害からの復興と再生を見守ってきました。1997年にチェルノブイリの廃墟となっていた保育園で撮影された太陽の絵を希望と見なし、「トラヤン」の時代からモチーフに展開してきた太陽を手にかくまう立ち上がっている作品なのです。ヤノベ先生の語り口で語られる作品の背景はとても魅力的で、参加者の中には後にSNSで知らなかった話を知ることができた書き込む人もいました。

## 2. 「サン・シスター」が地域社会に受け入れられた経緯と周辺の人々の声

「サン・シスター」が地域にどのように溶け込んでいったのかを知るために、講演会前に当時の関係者や近隣の方々へのインタビューを行っており、そのお話を次のように共有しました。

最初に、兵庫県立美術館の営業・広報課長（2013～2015年）であった岡野揮代美さんのお話を紹介しました。彼女によると、当時はSNSが流行し始めていた時期で、初めて「サン・シスター」を披露したFacebookの記事が多くの「いいね！」を獲得し、大変驚いたそうです。さらに、展覧会だけでなく、これまでとは別な切り口での美術館に関する取材が増えたことにも言及し、「サン・シスター」の印象的なビジュアルが多大な影響を与えたと話してくださいました。



「サン・シスター（Sun Sister）」（2015）

次にご紹介するのは、2018年に兵庫県立美術館の広報専門員として活躍し、Instagramを立ち上げた山本法子さんのお話です。山本さんは、「サン・シスター」の存在のおかげで従来とは異なるターゲット層に訴求できるようになったことは広報活動において非常に意義深かったと語りました。また、クールな安藤忠雄建築とキャラクター性の強いパブリックアートの組み合わせが非常に相性良く、これを他にはない独自の魅力としてアピールできたと話されました。さらには、角度によって異なる顔の表情や空と海の色を反射することで服の色が変わる様子が、とても楽しい撮影体験であったと当時を振り返ってくれました。

それから、美術館に最も近い神戸市立渚中学校の美術部の生徒さんと顧問の先生にもお話を伺いました。ちょうど10年前にはまだ3〜5歳だった生徒にとって、「サン・シスター」は物心がついた頃からの身近な存在です。親子でハーバーウォークを散歩したり、友達と一緒に写真を撮ったり、近くに住んでいるので身近に感じるなどの話がたくさん出ました。また、人の形をしているため他の彫刻作品よりも親しみやすいという意見や、親子ランニングのコースとして「サン・シスター」をゴールにしているという印象的なエピソードも伺いました。

ヤノベ先生は、「こんなに褒めてもらってばかりで」と少し照れくさそうにしながらも、「サン・シスター」のお色直し作業中に喜んでくれる人や、「地元の人たちに愛されている作品ですね」と声をかけてもらったエピソードを嬉しそうにお話しされていました。

また、嬉しいニュースとして昨年末の「サン・シスター」リニューアル以来、続々と取材の話が入ってきているそうです。「SAVVY」（京阪神エルマガジン社刊）の2025年2月号（「関西美術館さんぽ」特集）の表紙や「関西ミュージアムガイド」（朝日新聞出版刊）の見開きページ、神戸空港国際線に就航する台湾・スターラックス航空のプロモーション動画にも「サン・シスター」が紹介されました。設置後10年が経ちましたが、今もお多くのメディアに取り上げられていることは、地域を代表する作品として親しまれていることの証ではないでしょうか。

### 3. 小豆島を変えた大規模アートプロジェクトとヤノベケンジ作品

2010年に初開催され、今年で6回目を迎える瀬戸内国際芸術祭は、小豆島の発展にとって今や重要なイベントとなっています。ヤノベ先生は10年以上前からこの地域でパブリックアート作品を展開し、地域の限界集落という問題にも取り組んでこられました。その頃、TV番組を通じて京都芸術大学のウルトラファクトリーにタレント・映画監督のビートたけしさんが訪れ、共作を始めることになりました。「アンガー・フロム・ザ・ボトム（2013）」は、地球環境問題に対する地底からの怒りを象徴する作品（<https://yanobe.com/works/859>）で、井戸の中から「化け物」となった水の神様が定期的にせり上がり、水を吐き出します。「醤（ひしお）の郷」といわれるエリアのかつて醤油工場の敷地にあった古井戸跡に設置され、評判を呼びました。その後、地元有志団体によって、作品を覆うように社が建立され、美井戸（ビート）神社となりました。

他にも、小豆島の坂手港周辺には、地域のアイコンとなる作品が多数制作されており、フェリーターミナルの灯台跡に設置された光り輝く球体にドラゴンが鎮座している作品「ザ・スター・アンガー（2012）」（<https://yanobe.com/works/856>）や、小豆島で巻き起こるアートプロジェクトを「縁起」として「希望の島」となっていく神話を描いた「小豆島縁起絵巻（2013）」などがあり、瀬戸内国際芸術祭閉幕後もパブリックアートとして見ることができます。

ビートたけしさんの関与があったことで、当時数多くのメディアに取り上げられ、作品を見に多くの観光客が訪れるようになりました。それにより、滞在制作を行う作家たちや移住する若者たちが増え、地域の人々との交流が生まれるようになり、坂手港周辺の様子はアートとの関わりが始まる前と比べて大きく変化していきました。



「ザ・スター・アンガー」（2012）



「アンガー・フロム・ザ・ボトム」（2013）

このプロセスを長年見守ってきた小豆島町会議の谷康男議長（以下、谷議長）は、「作品だけでなく、ヤノベさんの人間性や人間関係、コミュニティも含めて、ひとつの大きな作品として捉えている」、「ヤノベワールドを小豆島に築くのが夢、小豆島を国内外のヤノベ作品のホームグラウンドにしたい」とインタビューで語られています。

ヤノベ作品が地域の人々に愛されているエピソードとして、先述のミラーボールのようにゆっくりと回転する作品「ザ・スター・アングラー」が止まっていると、「今日は大人しいな」と役場に電話がかかってくることもあるそうです。町の人々は一見作品を気にかけていないようでも、実はしっかりと見守り、受け入れているのです。谷議長はこのエピソードを笑顔で話してくださいました。

また、大阪から小豆島に移住した夫婦は、坂手港近くの広場で毎年開催される港祭りについてお話してくれました。このお祭りでは、「ジャンボ・トラヤン（船長）」(<https://yanobe.com/works/860>) が中心に置かれ祭りと町のシンボルとして親しまれているそうです。港祭りでは、余興として「トラヤン・クイズ問題」が出題されるなど、地域に密着した存在感を持っているとのこと。かつて神戸と小豆島を結ぶ連絡船ジャンボフェリーの水先案内人であった「ジャンボ・トラヤン（船長）」は、その役目を終えた今でも坂手町の人々と共に生き続けていました。

## 4. 航海を見守り続けた「ジャンボ・トラヤン」の新たな物語

小豆島では、複数のプライベートミュージアムを運営されている石井純館長（以下、石井館長）にもお話を伺いました。役割を終えたもう一体の「ジャンボ・トラヤン（オリーブ）」(<https://yanobe.com/works/861>) は、現在「小豆島現代美術館 MOCA・OLIVE（モカ・オリーブ）」の「ヒルトップ・テラス」に設置されています。石井館長はこの場所に作品を置いた理由として、作品が持つ物語性を非常に大切に考えているからだと教えてくださいました。ジャンボフェリーはノアの箱舟を象徴し、小豆島は希望の島とされています。航海を終えた「ジャンボ・トラヤン（オリーブ）」はこの希望の島に上陸し、今ではこの小高いオリーブの丘から瀬戸内海を行き交う船や島の人々の生活を見守っているのです。ここでは、「ジャンボ・トラヤン（オリーブ）」の新たな物語が始まっていました。

ヤノベ先生はこのお話に大変関心を持たれ、後日、小豆島を訪れた際にMOCA・OLIVEのヒルトップ・テラスに設置された「ジャンボ・トラヤン（オリーブ）」を見に行き、石井館長にもお会いして直接お話を聞かれたそうです。

## 5. パブリックアート作品が育んできた景色

これまでの内容から、ヤノベ先生のパブリックアートは多くの地域で特有の「顔」として定着していることが理解できました。また、ヤノベ作品に触れた人々は、その場所での体験をまるで絵画のように記憶している印象を受けました。例えば、ヒアリングの中で渚中学校の生徒が、家族で駆けっこをした際にゴールとして「サン・シスターまで走ろう」と言っていた話は、自覚していないかもしれませんが、これはアートが地域の「原風景」として深く根付いている良い例といえるでしょう。ある子どもにとっては愛する家族との思い出、また別の子どもにとっては創造力の源になっているかもしれません。ちょうどヤノベ先生が幼い頃から地元で「太陽の塔」（岡本太郎作）を繰り返し見て、それにあこがれ、アーティストになったように。



講演会 第二部 作品説明風景

この後、講演会の時間が迫っていたため質疑応答は行わず、そのままなぎさ公園へ移動。時折小雨が降る中、約100人の参加者と共に、ジョージ・リッキー、名和晃平、藪内佐斗司、三沢厚彦らの4つの作品を巡り、ヤノベ先生の感想やコメントを聞くことができました。

イベントの最後には、リニューアルされた「サン・シスター」とともに全員で記念撮影を行い、希望者には「サン・シスター」の前でヤノベ先生とのツーショット写真を撮ったり、屋内でサイン会があったり、交流の機会も設けられました。ヤノベ先生の真摯な対応に、参加された方々は非常に喜ばれていた様子でした。

## 6. 地域活性化の鍵となるパブリックアートの可能性

本イベント「パブリックアート散歩 with ヤノベケンジ」には約100名の方が参加されました。参加者の年齢層は10代から80代までと幅広く、特に40代以上の方が多く全体の70%以上を占めていました。また、女性の参加者もほぼ同様の割合でした。興味深いことに、参加者の約60%が兵庫県外から訪れ、中には関東地方から来た方もいらっしゃいました。このことから、地域を超えた集客力と影響力を持つイベントであったことが伺えます。多世代にわたる関心を引きつけたこのイベントは、新たに生まれ変わった「サン・シスター」を通じて、アートが地域に与える影響とその重要性を考える貴重な機会となりました。

本イベント開催に際し、さまざまな場所を訪れ、関係者の貴重な話を伺う中で実感したのは、パブリックアートが地域に与える影響の深遠さです。これらのアート作品は、地域の文化的価値を高め、コミュニティのアイデンティティを形成する上で、極めて重要な役割を果たしているといえるでしょう。具体的には、公共空間に設置されたアートは地域住民や訪問者に対して文化的な意義を提供し、日常生活に喜びや潤いを与えることで、地域への愛着を育むきっかけを作ります。また、アートの存在は観光の誘致にも一役買っており、地域経済の活性化にも大きく貢献しています。



サイン会でのヤノベ先生

このように、パブリックアートは地域の独自性やコミュニティの結束を強化する重要な要素となっており、同時に社会的なつながりや文化的な対話を生み出す力を備えています。公共の場でのアートは地域の歴史や文化を映し出し、住民同士の交流を促進しコミュニティの絆を深める役割を担っています。したがって、パブリックアートは地域社会にとって欠かせない資源であり、その存在は地域の活性化に大きく寄与していることは間違いありません。(本文:6,286文字)



講演会 第二部 彫刻「サン・シスター」前にて ヤノベ先生と集合写真

主 催／兵庫県神戸県民センター

開催日／2025年3月15日

テキスト／黒木杏紀、写真／兵庫県神戸県民センター

# パブリックアート散歩 with ヤノベケンジ

トーク＆周辺アート作品めぐり

兵庫県立美術館の海側にある野外彫刻Sun Sisterは、2015年に阪神・淡路大震災20年のモニュメントとして設置されました。今回10年ぶりに修復したことを受け、作者のヤノベケンジさんをお迎えしてトークを行います。

## ●14:00～ トーク

Sun Sisterはじめヤノベさんの様々なパブリックアートの紹介。各作品が設置された「場」や「地域」と作品との関係性について聞きます。

聞き手 / 黒木杏紀（アートライター）

## ●15:00～ 周辺アート作品めぐり

兵庫県立美術館の周辺には、他にも様々なアーティストのパブリックアートがいっぱい。ヤノベさんと一緒に散策しながら各作品について話を聞きます。

※雨天時は内容を変更することがあります

2025年3月15日(土) 14:00～15:40

兵庫県立美術館 ギャラリー棟1階 KOBELOミュージアムホール  
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1

定員120人・参加無料(先着順) 3月7日(金) 申込〆切

申込はURL又は2次元コードから申込フォームへ

<https://www.k-hirogo.org/event/kohfresgo/updates/form.do?id=173777240516>

主催 兵庫県神戸県民センター  
☎078-647-9092 (県民躍動室)



《Sun Sister》 2015 神戸市中央区



6神戸02-003A4

### 講師 ヤノベケンジ（現代美術作家）

1965年生まれ。大阪府茨木市出身。1991年京都市立芸術大学大学院修了。京都芸術大学教授。ユーモラスな形態に社会的メッセージを込めた作品群は国内外から評価が高い。香川県小豆島町や大阪中之島美術館など全国各地で大型の野外彫刻を手がけている。



《Jumbo Torayan(Olive)》 2013  
香川県小豆島町



《SHIP'S CAT(Muse)》 2021 大阪市北区

「パブリックアート散歩 with ヤノベケンジ」 チラシ